

2016年12月

子どもを取り巻く環境の変化 ～幼児期における家庭教育の意義～

情報学部 経営情報学科 新井ゼミ

B3P21047 小澤 麻衣

【卒業論文概要】

今日、日本の家庭教育力の低下が指摘されている。それによって、近年の子どもたちの育ちに大きな影響を与えている。ニュースで子どもによる犯罪や非行などの事件が取り上げられることが多くなり、近年の子どもの社会性の欠如が指摘されている。それらと家庭環境の関連性も強く、その原因として子どもを取り巻く「環境」の劣化が指摘されている。そこで、家庭教育力の低下の要因は、これまで著しく変化してきた日本の環境が関係していると仮定し、特に子の成長に重要との報告がされている乳幼児期の家庭教育の意義について、現在の日本が抱えている子どもや家庭をめぐる問題などを踏まえて考察した。家庭教育力の低下に対して多くの親たちは認識しており、熱心に取り組んではいるものの、核家族化による人の繋がり希薄化や生活の多様化、家庭支援の整備の遅れなどにより、子育てをする上で困難が生まれているようだ。

本来、子どもの生きる力の基本となる生活習慣や心の育ちは、家庭を基盤として育てていくものである。これらの教育が今、外部の機関である保育所や学校などに委ねられている。そのため、自分の子は責任を持って育てるとする親の教育意識は実際、低下してきているのではないだろうか。しかし、親たちは仕事を休むわけにもいかず、その両立にストレスを抱えやすい社会となってきた。海外との比較から日本は子育てに厳しい社会であることが分かった。

また、「育児は母親の役割」とする意識が残っているため、母親が頑張りすぎる傾向がある。昭和の頃の日本は相互扶助が盛んで、「縁」が大事にされてきた。子育てを見守る周囲の温かい環境があれば、養育者が子育てを楽しみと思える要因に繋がるのではないだろうか。そして、それは子ども自身に充実感、満足感を与えることが出来る。子育ては子を育てることだけでなく、それに関わる周囲の人たちや養育者自身も育つための重要な役割を持つものとして考えるべきである。

今後の展望は、これからますます家庭教育への支援に期待が持たれるだろうが、幼児期における家庭教育の意義について、その必要性は個々の問題ではなく社会全体に関わる問題として、子育てしやすい社会を築いていけるよう、支援に頼るばかりではなく意識を変えていかなくてはならない。